

## 国内経済情勢

### 概観

設備投資が根強い拡大を示し、輸出も機械類を中心に高水準が続けているが、個人消費は天候不順の影響もあって伸び悩み気味となっている。この間、流通・ユーザー段階では、需給緩和や原料価格の低下に伴う市況先安感などを背景に在庫調整の動きが続き、こうした事情を反映して商品市況は依然軟調、生産・出荷も1～3月大幅増加の反動もあってこのところ足踏み状態を示している。

7月の卸売物価は前2ヵ月円高の影響もあって微落したあと、輸出入品が再び上昇し国内完成品も原料コスト高の波及から続伸したため、反騰した。7月の消費者物価(東京、速報)は続騰を示し、前年比上昇率では、前年季節商品が長雨の影響で急騰したことを反映してやや低下したものの、季節商品を除くベースでは依然高水準が続いている。

金融面をみると、4～6月のマネーサプライ伸び率は前四半期に比べさらに鈍化した。一方、6月の全国銀行貸出約定平均金利は引続き上昇しているが、前月比上昇幅は幾分縮小した。

6月の国際収支をみると、輸入の大幅反動増などから貿易収支(季節調整後)が再び赤字となったが、長期資本収支が既往最高の流入超を示したことから、総合収支は久方ぶりに均衡する形となっ

た。この間、7月の為替相場は米国の市中金利反騰などを映じて月央以降円安化した。

#### 4～6月の生産、出荷は足踏み状態

6月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比\*、速報)は0.7%減(前月-1.2%)と2ヵ月連続の減少となり、出荷(速報)も0.1%の微減となった(前月-2.8%)。この結果、4～6月通計では、生産、出荷は前期比各0.2%増、0.4%減と、前四半期大幅増加(うるう年要因も加わって各+4.1%、+3.3%)の反動もあって足踏み状態を示した。この間、6月の生産者製品在庫(速報)は前月(+2.9%)に続き1.9%の増加となった。

\* 以下増減率は特に断らない限り前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

6月の財別生産、出荷の特徴をみると、一般資本財、資本財輸送機械の生産、出荷は設備投資関連機器(金属加工機械、電子計算機等)や輸出好調の小型自動車等を中心にかなりの増加を示し、耐久消費財の出荷も、エアコンや輸出向けカラーテレビが減少したほかは総じて増加した。反面、生産財(プラスチック、冷薄、板紙等)や建設財(棒鋼、コンクリート製品、アルミサッシ等)は、流通・ユーザー筋の買控えに加え、官公需、輸出の減退などもあって生産、出荷とも前月に続きかなりの落込みを示した。

この間、製品在庫の面では、需要堅調の一般資本財、資本財輸送機械などが高水準の生産を背景に増加し、生産財、建設財もメーカーの減産にもかかわらず、仮需はく落品目を中心にかなり積上

がった。

国内最終需要の動向をみると、6月の公共事業契約額(前年比)は12.9%と3ヵ月連続の減少を示した(4～6月-6.5%)が、7月の公共事業請負額(前年比)は地方公共団体の発注増を映じて14.0%の伸びとなった(前月+16.2%)。

設備投資動向については、6月の機械受注額(船舶、電力を除く民需)は、製造業からの受注反動減を主因に0.6%の微減となったが、4～6月通計では5.0%増と引続き増加傾向を示している(4～6月の前年比+16.9%)。また、6月の建設工事受注額(民間分、速報)も10.2%増とかなりの増加を示した(前年比+10.2%)。

消費面では、6月の全国百貨店売上高(通産省調べ、前年比、速報)は、天候不順による夏物衣料などの売行き不振にもかかわらず食料品が中元贈答向けを中心に好伸したため、9.6%増とまずまずの伸びを示した(前月+10.1%)。もっとも、7月に入ってから冷夏による季節商品の低迷持続が響きやや伸び悩んだ模様である。一方、7月の耐久消費財の売行きをみると、家電製品はビデオテープレコーダー、電子レンジ、カラーテレビ等が好調を持続したものの、冷夏の影響から主力のエアコンが前年を大きく下回ったほか、冷蔵庫、洗たく機等も幾分低調となった。7月の乗用車新車登録台数(除く軽、前年比、速報)もディーラーの拡販努力にもかかわらず1.2%減となり、4月以降4ヵ月連続して前年水準を下回っている。

雇用情勢をみると、6月の常用雇用(全産業、速報)は横ばいとなり(4～6月+0.3%)、有効求人倍率も前月並みの0.75倍となったが、完全失業率は1.89%と前月(1.98%)比低下した。

## 商品市況は引続き軟調

7月の商品市況をみると、メーカーの減産入りなどから5～6月に比べ軟化の度合いがやや薄らいだものの依然軟調裡に推移している。これは、需給緩和や原料価格の低下に伴う市況先安感などを背景に、流通・ユーザー筋が在庫調整を続けているためである。品目別には、非鉄(銅、鉛)が海外高を映じて反発したものの、条鋼類、天然米、石油、製材・合板等が統落し、石油化学、合繊糸、紙等も弱含みに推移した。もっとも、小棒、綿糸等では、月末近くになって8月の夏季減産を抑えたメーカーの売腰の強まり(小棒)や米綿高を映じた値ごろ買いから底入れ気配を強めている。

7月の卸売物価は0.4%の上昇と、前2ヵ月微落のあと反騰した(前年比+18.5%)。これは、国内市況商品が上記事情から統落したものの、原油、穀物、自動車等の輸出入品が再び上昇したほか、国内完成品も原料コスト高の製品価格への波及から資本財を中心に続伸した(前月比+0.5%、前年比+7.9%)ためである。

7月の消費者物価(東京、速報)は、果物等季節商品の反騰を映じて0.2%の上昇となったが、前年比上昇率では、前年季節商品(野菜)が長雨の影響で急騰したことを映じて7.1%に低下した(前月同+8.3%)。もっとも、季節商品を除くベースでは前年比8.5%の上昇と、引続き高水準が続いている(前月同+8.7%)。

## マネーサプライ伸び率は引続き鈍化

7月の金融市場をみると、銀行券は天候不順の影響もあって3,698億円の還収超(前年220億円の発行超)と、7月としては4年ぶりの還収超となり、月中の平均発行残高(前年比)も6.7%の低い伸びにとどまった(前月+8.3%)。一方、財政資

金の動きを前年同月と対比してみると、一般財政の揚超幅が税込、郵貯の好伸や前年7月に実施された資金運用部による国債買入の売戻しなどから著増したほか、国債の増発、外為会計の揚超なども加わって、総収支じりでは前年を大幅に上回る29,199億円の揚超となった(前年同5,983億円)。このため、月中の資金不足額は26,263億円と7月としては既往最大となり(前年同6,802億円)、日本銀行は手形・債券オペレーションや貸出等によりこれを調整した。

こうした状況下、コールレート(無条件物、中心レート)は、市場の繁閑を映じて小刻みの変動を繰返しつつも、通月高水準を持続した(月末12.750%、月中+0.0625%)。一方、手形売買レート(2山越)は9月以降の季節的資金余剰期を控へ月初から低下傾向をたどり、12.6875~12.8125%で越月した(月中-0.375~-0.50%)。

6月のマネーサプライ伸び率( $M_2 + CD$ 平残、前年比)は9.6%となり(前月10.3%)、4~6月中平残では10.1%と市中貸出の抑制などから前四半期(10.6%)に比べさらに鈍化した。一方、6月の全国銀行貸出約定平均金利は引続き上昇しているが、上昇幅自体は0.209%と前月(0.387%)比幾分縮小した(月末8.818%)。

7月の公社債市況をみると、証券会社の保有額が高まっているほか、信託、農林系統等でも模様ながめ姿勢を強めているため通月軟弱商状を呈した。この間、事業債の発行条件は、既発債市場利回りと新発債応募者利回りとの乖離を背景に8月発行分から改定された(応募者利回り0.1%引下げ)。一方、株式市況は手掛り難から低調に推移した(東証指数、月末470.90、月中-1.87%)。

### 為替相場は7月央以降円安化

6月の輸出(通関、ドルベース)は、前2か月大増増加の反動や貿管令の発動によるイラン向けの落込みなどから0.3%の微増にとどまり(前月+7.2%)、数量ベースの前年比伸び率も17.2%と前月(19.7%)比やや鈍化した(もっとも、4~6月通計では同20.8%と依然高水準)。品目別には、自動車、二輪自動車、テープレコーダー等の機械類がかなりの増勢を続けたものの、鉄鋼、合繊、プラスチック等の素材品目は米国、イラン向けなどを中心に減少し、テレビも中国向けの船繰り難などから伸び悩んだ。

一方、6月の輸入(通関、ドルベース)は前月減少(-4.8%)の反動や原油、鉄鋼原材料(鉄鉱石、石炭等)の入着集中などから10.4%の大幅増加となったが、数量ベースではほぼ前年並みの水準にとどまっている(前年比-0.2%、4~6月同-2.5%)。

6月の国際収支は、上記輸出入動向を映じて貿易収支(季節調整後)が278百万ドルの赤字となり(前月124百万ドルの黒字)、経常収支(同)の赤字幅も1,334百万ドルと前月(同985百万ドル)比拡大した。この間、長期資本収支は為替相場の円高予想などを映じた対日証券投資の増加を主因に既往最高の流入超となり、この結果、総合収支は53年10月以降連続赤字のあと、当月は久方ぶりに均衡する形となった(前月247百万ドルの赤字)。

7月のインターバンク米ドル直物相場は、米国の市中金利反騰などを映じて月央以降円安歩調をたどり、226円85銭で越月した(月中8円70銭の円安)。

(昭和55年8月12日)